

◇ 国 語

国 6－1～国 6－18 まで 18 ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

誰かを支援するためには、やはり支援者が元気でないといいけません。子どもを含め誰かを支援するためにはボウダイなエネルギーが必要で、自分が頑張れないのに、根気強く相手のやる気を引き出したり、頑張らせたりするのは困難です。ですので、支援者自身が相手のために頑張るぞという気持ちになれることが大切です。子どもを支援する上で一番の効果的な支援は何かと言え、その子の保護者に「この子のために頑張ろう」と思ってもらうことなのです。

ところで、子どもが勉強を頑張るためには、良質な教材、良質な教師、良質な環境の3つがそろわないといけません。どれも欠けてもなかなかうまくいかないでしょう。この場合、保護者の役割は「良質な環境」に当てはまります。学校で頑張って、疲れて帰ってきた子どもたちには、家に帰ってホッと安心できる環境が必要です。また子どもが頑張ろうとしたときに、そっと寄り添ってあげる伴走者としての役割も必要です。保護者は子どもにとって最も身近な支援者なのです。ですので、保護者は大変です。

こういった保護者のために、場合によっては誰かが保護者自身の話を「じつと聞いてあげる」ことが必要です。「子育ての苦勞を労う」などの保護者の頑張りをサポートする支援も大切になってきます。保護者も一人で頑張ることはできません。

では、保護者に前向きになってもらうには、何が必要でしょうか。ここで非行少年の保護者の例をご紹介します。

非行少年たちを再非行させないためには保護者の協力が不可欠です。私の勤務していた少年院では、保護者会が定期的に開かれていました。入院時、中間期、出院時と、保護者会は最低年に3回は開催されていました。

保護者は、いったい何を言われるのか不安な面持ちで少年院にやって来られます。しかし、保護者に対して、これまでの子育てを反省してもらったり、少年院を出てからもっとしっかり子どもに向き合うように指導したりするわけではありません。それらは少年院に入るまでに警察や少年カネベツ所、家庭裁判所でも散々言われてきたことなのです。保護者はそのたびに謝り、被害者にも頭を下げ続けてきたのです。

彼らは、一生懸命に向き合ってもなぜ非行化するかが分からない我が子の支援に疲れ果てている状態でした。そして、犯罪を起こした我が子のことを誰かに話したりもできず、孤立していました。しかし、少年たちを再非行させないためには、そういった保護者にもうひと頑張りしてもらわないといけません。そのために保護者を支援していかねばならないのです。

では、どういう支援が望ましいのか。『保護者の話を聞く』『子どもの特性を知ってもらう』といったものも考えられますが、究極の保護者支援になるのは、保護者自身に子どものために頑張ろうと思ってもらうことです。ですから、少年院の保護者会では、保護者自身に元気になってもらって、もう一度子どもと向き合おう、もう一度頑張ってみようと思ってもらうように心がけていました。

そのためにどうするか。少年院ではまず保護者に労いの言葉をかけます。

「これまで子育てご苦労様でした。大変苦労されたことでしょう。これからは我々に任せてください」

そう伝えます。少年院にきて「また教官から責められたり指導を受けたりするのか」と思っていた保護者は、ホロリとするようです。少年院側も、とにかく保護者に元気になってもらうことが目的ですので、入院時の保護者会では少年たちの問題はまだ伝えません。まずは保護者を、少年を支える誰よりも大切な人として尊重するのです。

必ずしも近くにはない少年院まで保護者が我が子に会いに来ること自体、エネルギーが要ります。最初に任せてくださいとは言われたものの、果たして子どもがどんな状態になっているのかは分からない。そんな中で子どもに会いに行くことは、想像以上に勇気が要るのです。

ア、少年院に入って数か月した中間期の保護者会などでは、少年たちには面会に来てくれた保護者に感謝の言葉を述べさせるようにしていました。社会では親に対して暴言を吐いたり暴力をふるったりしていた少年たちも多い中、保護者もウキウキとして面会室で我が子が来るのを待っています。ところが予想に反して、

「今日は面会に来て頂いてありがとうございます！」

と我が子から大きな声で挨拶されるのですから、保護者は驚きます。無視されるのではないか、怒りをぶつけられるのではないかと思っていた保護者からすると、『あの子がありがとうと言ってくれた』『少年院にきてこんなに変わるのか』と意表をつかれます。

これには裏があります。実は事前に少年たちには感謝の言葉を言うように何度も練習させているのです。この時点では、少年たちの感謝は『心から』ではないかもしれませんが、しかし、保護者に『我が子かわいい』と思ってもらうためなら、それで構いません。まずは保護者に安心して面会にきてもらう仕掛けが必要なのです。支えていくことが大変な我が子に対して、僅かながらも

希望を感じ、「もう一度頑張ってみよう」という気持ちを持つてもらえれば、充分に成功と言えます。

よく「大人が変われば子どもも変わる」と言われますが、私は逆だと感じています。子どもが変わったのを目の当たりにして、「まだまだ変わる可能性があるんだ、もう少し頑張ってみよう」と大人が変わるのです。イ、子どもが変われば大人も変わる”のです。

三 もちろんそれだけでは、解決はしません。保護者を支援するなら、今後どうやって子どもと向き合っていくかも一緒に考えていきます。ポイントは、

- ・ 基本的には保護者のやり方を否定しない
 - ・ 無理に保護者を変えようとせず、子どもの成長を目標にする
- といった点です。

非行化した子どもたちですから、どうしてもこれまでの保護者のやり方を変えなくなるかもしれません。しかし、保護者自身がこれまでの自分たちのやり方がよくないことが分かっている場合でも、否定されると、それだけでやる気を奪われてしまいます。また、保護者になんか欲しいと願うと、どうしてもそれが態度に出てしまいます。そもそも、今さら他者から言われて変わるくらいなら、とくに変わっていたはずなんです。ウ、長年、家族内で試行サクゴ^oをしてきたことでうまくいったこともあるはずなので、逆にそのような保護者の対応を支援のヒントにしていく方が、お互いにとっても有益なのです。

エ、保護者にこれまでとまったく同じように接してもらっていいという訳ではありません。やはり変わってほしい点もあります。保護者が変わったと思われるきっかけを、以下にご紹介しておきます。

- ・ 保護者自身の体験が認められたとき

これまで子どものことで責められてばかりだったのに、少年院にきて初めてイロウ^Fの言葉をかけてもらった。初めて自分のことを認めてくれた。

- ・ 信頼できる人が見つかったとき

この先生なら子どものことを分かってくれる。信頼してみたい。

- ・子どもに変化が見られたとき

これまで自分たちに対して偉そうに言ってきた子どもが、感謝の言葉を言えるようになった。変わることができるんだ。

- ・子どもにとっての自分の役割が分かったとき

こんな自分でも面会で喜んでくれる。まだ自分もできることが残っている。

これらは非行少年の保護者に限った話ではありません。一般の保護者にも言えることですし、普段の人間関係にとっても同様なことが言えるのではないでしょうか。

(中略)

ところで、子どもにとって本当に自分を支えてくれる親とは、どんな人なのでしょうか？ 次のような親像が浮かぶかもしれません。

- ・ずっとそばにいてくれる人
- ・「大好き」を何度も言ってくれる人
- ・何でも願いを聞いてくれる人

実は、子どもはこんな親を求めているわけではないのです。求めているのは、生きづらく困っている時に支えてくれる「安心の土台」、チャレンジしたい時に見守ってくれる「伴走者」なのです。衣食住に加えこの2つがあれば、頑張れない子どもたちもチャレンジできる人間に変わっていくのです。

(宮口幸治『どうしても頑張れない人たち』による)

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ボウダイ

- ① ジンボウが厚い上司
- ③ 腹部のボウマン感
- ⑤ 綿と麻のコンボウ

② ボウケンの始まり

④ 争いをボウカンする

1

B カンベツ

- ① 植物ズカンを見る
- ③ カンカツ外の事件
- ⑤ 状況をカンアンして動く

② アツカンの演技

④ 固定カンネンを捨てる

2

C キョウキョウ

- ① キョウリユウの化石
- ③ メイキョウ止水の心
- ⑤ ヘンキョウな性格

② キョウギを重ねる

④ 自由をキョウジュする

3

D サクゴ

- ① サクバンの出来事
- ③ 考えがサクランする
- ⑤ タイサクを講じる

② 代案をモサクする

④ 売上をサクシユする

4

E イロウ

- ① アンイな解決策
- ③ 交渉をイニンする
- ⑤ 退職希望者をイリユウする

② 事件のケイイを話す

④ 合成セインの布

5

問二 空欄

 —

、

 —

 に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選べ。

—

- | | |
|-------------|------------|
| ① ただし―要するに | ② そして―また |
| ③ けれども―すなわち | ④ 従って―それゆえ |
| ⑤ そこで―つまり | |

—

- | | |
|-------------|------------|
| ① さらに―ちなみに | ② つまり―けれども |
| ③ むしろ―しかし | ④ そして―ところで |
| ⑤ とはいえ―ところが | |

問三 傍線部（a）「子ども」とあるが、「子」に関することわざの説明として誤っているものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

- | | |
|---|---|
| ① 子のかすがい
… 子はその両親の仲を繋ぎとめてくれるものだということ | ② 老いては子に従え
… 年をとったら何事も子に従っていくほうがいいということ |
| ③ 三つ子の魂百まで
… 子に対する愛情は長い年月が経っても変わらないということ | ④ 親の心子知らず
… 子は親の愛情を解さず勝手気ままにふるまいがちだということ |
| ⑤ 親子は一世
… 親と子の関係は現世だけのつながりにすぎないということ | |

問四 傍線部（b）「孤立」とあるが、これと同じ意味を持つ四字熟語を、次の①～⑤の中から一つ選べ。

① 我田引水

② 一騎当千

③ 付和雷同

④ 四面楚歌

⑤ 百家争鳴

9

問五 傍線部（c）「意表をつかれます」とあるが、その語義として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

① 奇跡的な出来事に感動して言葉が出てこないということ

② 思いもよらない出来事に対して仰天するということ

③ 不安な気持ちが解消されてほっと安堵するということ

④ 予想もつかない事態が発生して困惑するということ

⑤ 思いがけず訪れた幸せに実感がわかずにいるということ

10

問六 傍線部（二）「伴走者としての役割」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

① 子どもの心に寄り添い、どんな時でも常にそばにいて子どもを支え続ける役割

② 子どもの意思や行動を尊重しながら、子どもへの愛情を言葉にして届ける役割

③ 子どもがチャレンジしたいと思った時に傍に寄り添い、その頑張りを見守る役割

④ 子どもが生きづらさを抱えている時に安心感を与え、疲れた心を回復させる役割

11

問七 傍線部（二）「私の勤務していた少年院では、保護者会が定期的に開かれていました」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

12

- ①子どもたちのありのままの姿を保護者に伝え、適切な支援策は何かを保護者とともに話し合えるようにするため。
- ②子どもの問題行動に疲れた保護者を安心させ、今後の支援は教官に全て任せてよいことを理解してもらうため。
- ③子どもたちが個々に抱えている課題を保護者に伝え、今後どのような支援が必要かを前向きに検討していくため。
- ④子どもたちの支援者である保護者に希望を与え、我が子をしつかり支えていきたいという意欲をかき立てるため。

問八 傍線部（三）「もちろんそれだけでは、解決はしません」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

13

- ①少年院の教官が「子どもが変わったように見せかける」だけでは、保護者の心に変化は訪れないということ。
- ②少年院の教官が保護者のやり方を否定するだけでは、親子関係を改善させていくことはできないということ。
- ③保護者が意識を変えただけでは、非行化した子どもが人生をより良く生きられるようにはならないということ。
- ④少年院にいる子どもが教官の言うことを聞くようになっただけでは、まだ更生したとはいえないということ。

問九 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から二つ選べ。

14

15

①子どもが勉強を頑張るためには良質な教材、良質な教師、良質な環境という三つの条件が揃うことが重要である。保護者は家庭において子どもの知的好奇心を伸ばす役割を担うという点で「良質な環境」に当てはまる。

②子どもは大人の背中を見て育つ。挫折を味わった子どもたちを支援する上で最も効果的なのは、身近にいる大人たちが子どもを承認しつつ、「自ら変わろうとする姿勢を見せようと努力する」ことである。

③保護者が子どもの支援に対して前向きになるきっかけは複数ある。頑張り进行者から承認された時、信頼できる人と出会った時、子どもが変わる姿を見た時、子どもに対する自分の役割を知った時などがそうである。

④頑張れない子どもがチャレンジできるようになるためには、保護者と教員が子どもの特性を理解した上で支援を行う必要がある。そのために、保護者と教員が子どもに関する情報を毎日共有し合うことが大切である。

⑤保護者は子どもにとって最も身近な支援者であるが、その支援には多大な労力が必要となる。そのため、周囲が保護者の心に寄り添い、子どもの支援に前向きになれるようサポートしていくことが重要である。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

余韻が作品のことばのあり方に支えられて感じられる範囲に限定されるのに対し、余情は文章によって生まれたイメージに対して抱く情緒であり、そこから連想が働いて文章の奥へ、その先へと発展し、一つの文学体験として読者の心に生き続ける情緒までを広くおおう。

本を読み終えたあとも、その作品のイメージやある種の感動が心に残ることもある。ふとしたきっかけでその作品を思い出すこともあり、しばらくしてまた読み返したくなることもある。作品を読んでいる途中で、ある情景や心情が伝わって深く読者の胸を動かすという情緒もあり、行間から意味を読み取り、カンガイ^Aにひたるというかたちで味わう余情もある。

それではいったい、余情感がたよう文章とは具体的にどのようなものなのだろうか。その正体を探るため、以前行った調査の結果をもとに、以下、そこから得られた^(三)主要な結論を紹介する。

まず、文章にある程度の品格をそなえていることが土台になるようだ。気品があっても、難解すぎる文章では余情を起こしにくい。表現があまりむずかしすぎないことも重要である。

また、多くの情報を用いて論理的に展開する文章よりも、情景描写を適度に盛り込み、感情を込めて叙述する文章のほうが読者の余情感をかきたてやすい。ひたすらストーリーを追求する文章には余情を感じにくいようだ。

話題の面では、読者にとつて身近なことが描かれているほうが、自分の体験を思い出しやすく、余情を醸し出す基礎ができる。「そういえばそんなことが自分にもあった」と、読者に思わせる文章である。さらに、人間を描いた文章よりも、秋、森の夕暮れ、夜の静けさなどを描いた美しい風景画のような文章に余情を感じることが多いともいう。それが美しい思い出のよみがえる契機となるからだろう。

簡単にすべて納得できる文章よりも、なにがしかの疑問を感じる文章のほうが余情が生まれやすい。なにか得体の知れないところがある文章、キミョウ^Bな存在感のある文章のほうが、読む人間の心の奥に深くしみこむようだ。あまり内容のまとまりがき

つちりしておらず、いくらか完結性に欠ける文章にも余情を感じる傾向がある。作品の内と外とのぼんやりしたつながり、そういう意味でのジゾク感を基礎として余情というものが成立するのだろう。

具体的な言語表現上のテクニックとしては、特に倒置表現が余情を生むのに即効性がある。語順が逆転するために結果として、その箇所のことばとことばとが非慣用的に結びつくことになって、その間に偶然生じた論理的なすきまが余情感を引き起こすのだ。このテクニクは芥川龍之介の文章にしばしば見られる。

おれは籐の杖を小脇にした儘、気軽に口笛を吹き鳴らして、籐懸の葉ばかりきらびやかな日比谷公園の門を出た。「寒山拾得は生きている」と、口の中に独り呟きながら。

——芥川龍之介『東洋の秋』

「呟きながら」という文末表現を論理的に受けるはずの「門を出た」は前の文にすでにあるが、こうして倒置法を用いて「呟きながら」と文を閉じること、本来の **ア** の位置が見かけ上空白になる。そのため、なにかが省略されたような印象が生じ、それが余情感を誘うのである。

比喩表現も、使い方によっては余情を誘う一因となる。そこに臨時に比喩的に表現されたものと、そのことばが本来指し示すはずの概念との二つのイメージのずれが、奥行きを感じさせ、余情生成を促すのだ。佐藤春夫の『田園の憂鬱』の中の次の一節も、そうした例の一つと言えよう。

そうして、その秋の雨自らも、遠くへ行く淋しい旅人のように、この村の上を通り過ぎて行くのであった。彼は夜の雨戸をくりながらその白い雨の後姿を見入った。

ここには「雨」を「旅人」ととらえ、その「後姿」を見つめる「彼」の眼、あるいは作者の眼がある。この **イ** 発想

がバネとなって、文章はそこで広い空間を抱え込んで展開する。そして、初秋の雨という現実が旅愁の心を誘い、その旅愁という気持ちに促されて雨に旅人のイメージを重ねる。今、作中での「彼」が見つめる白い雨の後ろ姿が、実は自らの旅人としての心の絵姿であったことにはと気づくとき、読者はこの一節のしつとりとした余情に濡れるのだ。

同じ用語をくりかえし用いたり、逆に、同じことを指すのに別々のことばを用いたりするのも効果的である。前者は反復使用によって文面に浮き出たことばとその周囲のことばとの凹凸が奥行きを感じさせるのだろう。後者は、同じ意味で使われたそれぞれの語が多義語としてもっている他の意味、すなわち、そこで実現していない意味が複雑に響き合って、情報の奥行きを意識させるのかもしれない。表現の「間」を指示するダッシュやリーダーの記号も、文章に空隙を持ち込むため、やはり余情感をカンキするうえで強力な手段となる。

たつぷりと余情を含み、それを支えている言語表現のしくみがわかりやすい例となれば、やはり辻邦生の『旅の終り』あたりだろう。

雨はまだ降りしきり、街燈の光のなかで、雨脚がしぶきをたてていた。雨につつまれた町は死にたえたように静まりかえり、事件のあった家も闇のなかでひっそりしていた。さっきの騒ぎはうそのようだった。しかしかえって、この雨にうたれた空虚な闇が、私に、最後にここまできた若い男女のことを考えさせた。なぜかこの二人が死んだことが、私には、安らかな、ある悲劇の終末のような気がした。そこに空虚と沈黙と同時に、果てしない休息もあるような気がした。「こんな静かな町で、誰にも知られず、野心もなく、暮してみてもいいわね」妻がそういつたときの気持が、私のなかに、雨のしづくのように、流れ込んでくるようだった。その妻は蒼ざめて、いまは静かにねむっている。(中略) 街燈の光のなかにしづく雨脚を、ながいこと見つめていた。

旅は人生にたとえられ、人生は旅にたとえられる。この文章がその旅と人生とを重ね合わせて描いているために、余情の生じ

やすい構造になっているという点がまず指摘できる。現実とのぶつかりをシヨウゲキ^Fそれ自体として描かず、そのことがもたらす心理的な事実をとおして間接的に伝える点も、余情を生み出す基盤となる。

言語面に密着した表現技術としては、「空虚な闇」といった象徴的な表現、「ある悲劇」といった不定の指示、「なぜか」という未解決の叙述、「……ようだった」「……気がした」というふうに断定を避ける文末表現など、

ことがあげられる。が、もう一つ忘れてならないのは、「妻がそういったときの気持が、私のなかに、雨のしずくのように、流れ込んでくるようだった」という比喩表現の機構である。街燈の明かりに照らされた雨が主人公の物思いにふける姿を映し出す場面だ。その現実の「雨」が「雨のしずくのように」という

甲

エ。余情とはそういうものではあるまいか。

ただし、それを濫用すると「間」を読者に強引に押しつけることになるので逆効果になる。そのことは心しておきたい。

今年の夏の暑さはまた格別です。でも珍品堂は、昨日も一昨日も何か掘出しものはないかと街の骨董屋^{こっとう}へ出かけて行きました。例によって、禿頭^{とくとう}を隠すためにベレー帽をかぶり、風が吹かないのに風に吹かれているような後姿に見えているのを自分で感じているのです。先日、丸九さんからの手紙を見て、一年後には伊万里^{いまり}なるものが実質的な相場になると予想して、前祝に飲みすぎて腹を毀^{こわ}したのです。このところ、下痢のために少し衰弱しているのです。

—井伏鱒二『珍品堂主人』

「ちゃんとした学校の先生」くずれで、趣味の骨董が高じていつのまにか本職になった珍品堂は、骨董の売買に行き詰まる。ちやうどその折に金主から話があつて料亭を任される。道具や料理に凝りに凝ったかいがあつて、途上園というその店は繁盛する。ところが、金主の紹介で迎え入れた顧問格の蘭々女という茶の師匠にいつか弱みを握られ、支配人という自分の座をじわじわと侵食され、心血を注いで育てたその店から、ついにいびり出されてしまう。

引用箇所はそのラストシーンだ。

夢やぶれ、「^三窮すれば通ずる」と、ふたたび骨董の道に舞い戻るひとりの男がいる。その愛すべき俗人は、「ぼろい儲けをするたびに、自分の何よりも気になる頭の毛の薄いのが、そのつど禿げ募るといふ気がする」。そして、「風が吹かないのに風に吹かれているような後姿」を自分で気にしながら、今、画面上をふらふらと歩いていく。この作品が映画化された折、その思い屈した後ろ姿の感じが出せれば映画は成功だと作者自身がつぶやいたという。むろん、その感じはラストシーンだけを見た観客に通じるわけではない。小説でも、作品の全叙述がその後ろ姿に流れ込んでこそ、そういう感じが実現するのである。

オ、こうして絶対的な時間をつくりだして作品が象徴的に幕を閉じようとするとき、井伏鱒二は最後に、「このところ、下痢のために少し衰弱しているのです」という一文を追加する。秋風落莫^{らくばく}、観客の視線を集めるその見せ場で、見得を切って花道をさがることになったこの作家は、こんなふうには、腹をくだしたことを書き添えて絶対境に水をさす。こうして、クライマックスをあわてて消しかかる大仰なほにかみが、結果として神韻とも称すべき幕切れを実現させた。が、同時にまた、それが、余情というものの存在を、そして作品自体をとつともなく難解なものにしていることも事実だろう。

(中村明『文章作法事典』による)

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A カンガイ

- ① テンガイ孤独の身の上
- ② およその数のことをガイスウという
- ③ 一定の要件にガイトウする
- ④ ガイゼン性の乏しい推測
- ⑤ モラルの低下にガイタンする

16

B キミヨウ

- ① 成功をキタイする
- ② 復興のキウンが高まる
- ③ 処置が不十分であることをキグする
- ④ コウキの目にさらされる
- ⑤ キカイ体操部に入る

17

C ジゾク

- ① ナンジの病
- ② 願書をジサンする
- ③ ジシヨを引く
- ④ ジタ共に認める
- ⑤ ジアイに満ちた顔

18

D カンキ

- ① 美術館で名画をカンシヨウする
- ② カンメイを受けた言葉
- ③ 彼の表情はカンキに満ちあふれていた
- ④ 国会で証人をカンモンする
- ⑤ 利益の一部を社会にカンゲンする

19

E シヨウゲキ

- ① 予算の復活セツシヨウをする
- ② チュウシヨウ的な表現
- ③ シヨウガイ保険に加入する
- ④ シヨウソウ感に駆られる
- ⑤ 貯蓄をシヨウレイする

20

問二 空欄 ア・イ・ウ・エ・オ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア	① 独立語	② 述語	③ 修飾語	④ 接続語	⑤ 主語	21
--	-------	------	-------	-------	------	---

イ	① 心理的	② 現実的	③ 擬人的	④ 消極的	⑤ 畳語的	22
--	-------	-------	-------	-------	-------	---

ウ	① 象徴的	② 限定的	③ 具体的	④ 非限定的	⑤ 論理的	23
--	-------	-------	-------	--------	-------	---

エ	① 提喻	② 隠喩	③ 諷喩	④ 直喩	⑤ 換喩	24
--	------	------	------	------	------	---

オ	① たとえば	② そして	③ しかし	④ したがって	⑤ なぜなら	25
--	--------	-------	-------	---------	--------	---

問三 空欄 甲 に入る文として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

26

- ① このようにして作品の“景”と“情”とがしっくりと融け合う
- ② このようにして作品の“形式”と“内容”とがしっくりと融け合う
- ③ このようにして作品の“現実”と“幻想”とがしっくりと融け合う
- ④ このようにして作品の“登場人物”と“作者”とがしっくりと融け合う

問四 傍線部（二）「主要な結論」の例として当てはまらないものを、次の①～④の中から一つ選べ。

27

- ①簡単にすべて納得できる文章よりも、なにがしかの疑問を感じる文章のほうが余情が生まれやすい。
- ②ひたすらストーリーを追求する文章には余情を感じにくいようだ。
- ③感情を込めて叙述する文章は、多くの情報を用いて論理的に展開する文章に比べて、完結性に欠けるところがあり余情を感じにくいようだ。
- ④なにか得体の知れないところがある文章、キミヨウな存在感のある文章のほうが、読む人間の心の奥に深くしみこむようだ。

問五 傍線部（二）「窮すれば通ずる」の説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

28

- ①いかなる困難なことも、精神を集中して行えば必ず成し遂げられること。
- ②貧乏すると、世俗的な苦勞が多いので、才知がにぶったり、品性が卑しくなったりすること。
- ③行き詰まって、どうにもなくなると、案外困難を切り抜ける道が見つかること。
- ④もう後には引けない状況の中で決死の覚悟で事にあたること。

問六 本文のタイトル(題)として、最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

29

- ① 言語表現上のテクニック
- ② 絶対的な時間
- ③ 余韻について
- ④ 文章の奥へ、その先へ
- ⑤ 表現の「間」

問七 本文の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。

30

- ① 余情が作品のことばのあり方に支えられて感じられる範囲に限定されるのに対し、余韻は文章によって生まれたイメージに対して抱く情緒である。
- ② 倒置表現は、語順が逆転するために結果として、その箇所のことばとことばとが非慣用的に結びつくことになって、その間に偶然生じた感覚的なすきまが余情感を引き起こす。
- ③ 同じことを指すのに別々のことばを用いると、同じ意味で使われたそれぞれの語が多義語としてもっている他の意味、すなわち、そこで実現していない意味が複雑に響き合って、余情を誘う一因となる。
- ④ すべての比喩表現は、臨時に比喩的に表現されたものと、そのことばが本来指し示すはずの概念との二つのイメージのずれが、奥行きを感じさせ、余情生成を促すと言える。